

南区まちづくり ビジョンの検証



目次

- まちづくりビジョンの検証の目的 P 1
- 南区の人口・世帯数の推移 P 2
- まちづくりビジョンの基本目標・取組方針 P 4
- ビジョンの検証方法について P 5
- 主な取組事例 P 6
- 区民アンケート結果 P14
- まちづくり懇話会における主な意見 P20
- 区としての総合評価 P23



令和5年(2023年)5月
南区役所総務企画課

◆まちづくりビジョンの検証の目的

■目的

現行ビジョンの検証にあたっては、ビジョン策定後の南区のまちづくりに関する各取組等について総合的な評価及び課題の抽出等を行い、今後のまちづくりに反映していくことを目的とする。

■南区まちづくりビジョン策定までの経緯

・平成24年4月 政令指定都市移行

熊本市に5つの区(中央・東・西・南・北)を設置

・平成25年3月 南区まちづくりビジョンの策定

政令指定都市移行後の**区の魅力・特性を生かした協働で進めるまちづくりの方向性を示すものとして、「南区まちづくりビジョン」を策定**。めざす区の姿を「いきいき暮らしのまち南区」とし、その実現に向けた目標年次を10年後の令和4年度(2022年度)に定める。

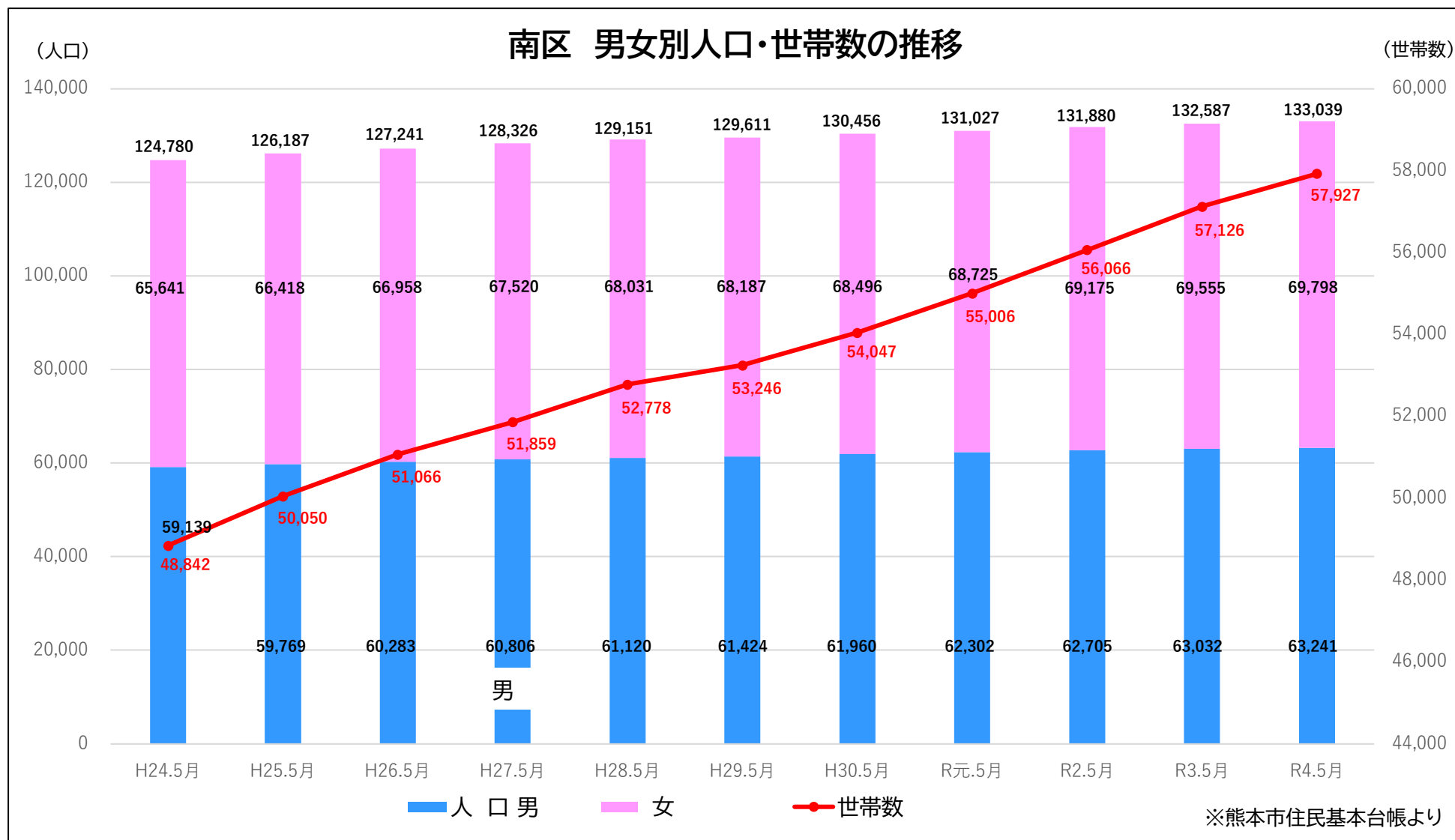
・平成30年3月 まちづくりビジョンの改訂

「熊本地震」や「まちづくりセンターの設置」等、様々な情勢の変化を踏まえ、懇話会の意見や高校生等を含めたワークショップ等による意見を反映し、地域の復興に向けたビジョンの改訂を行った。



◆南区の人口・世帯数の推移（H24.5⇒R4.5）

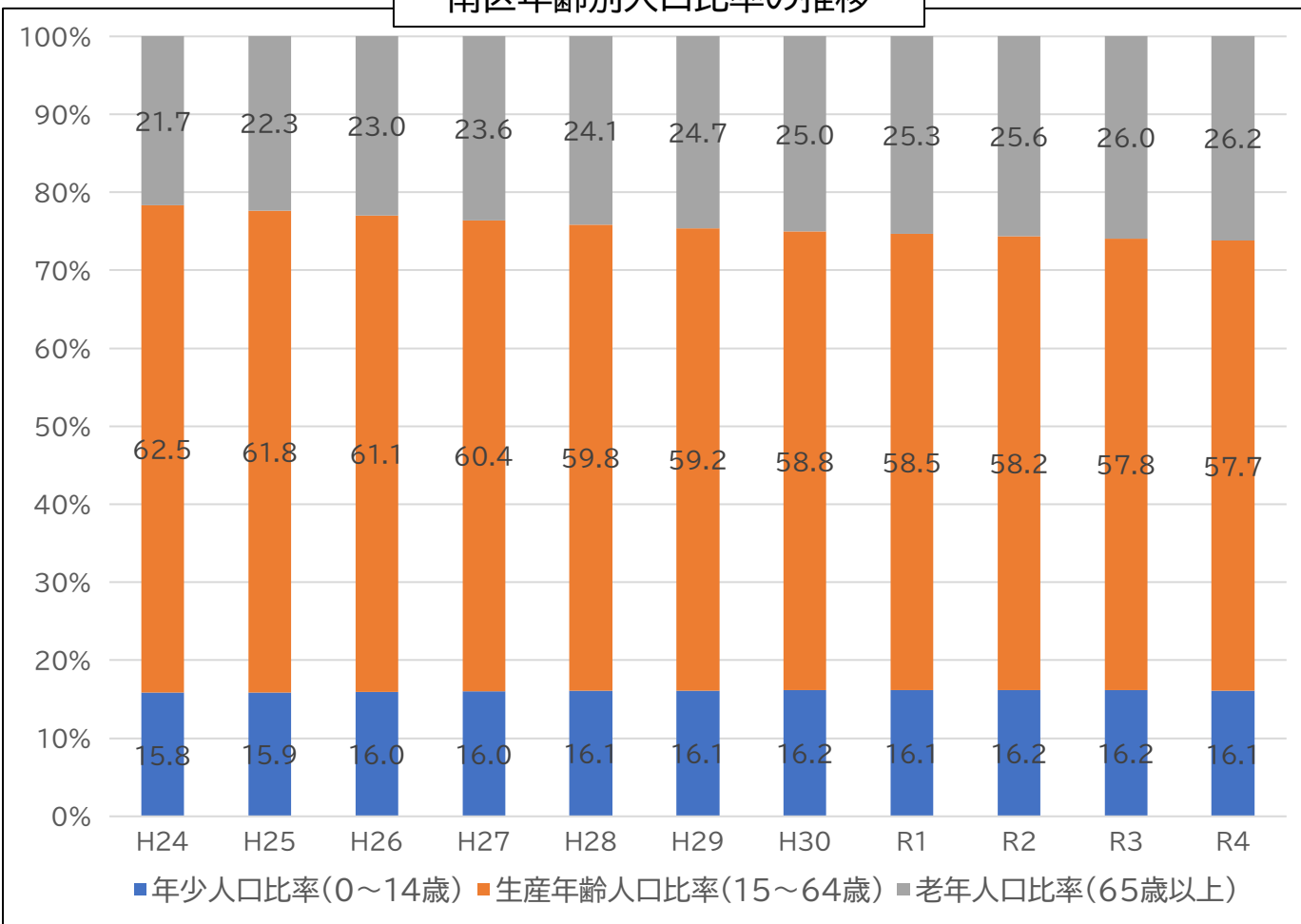
平成24年以降、南区の人口・世帯数ともに年々増加傾向にある。平成24年から令和4年までの人口増加率106.6%に対し、世帯増加率118.6%となっており、単身世帯や夫婦のみの世帯が増加しているものと予想される。



◆南区の人口・世帯数の推移（H24.5⇒R4.5）

平成24年以降、南区の老年人口比率は年々増加傾向にあるが、年少人口比率はほぼ変化がない。
また、南区は5区の中で、年少人口比率が最も高い。

南区年齢別人口比率の推移



※熊本市住民基本台帳より

5区の年齢別人口比率の推移

区 名	H24			R4		
	年少 (0-14)	生産 (15-64)	老年 (65-)	年少 (0-14)	生産 (15-64)	老年 (65-)
中央区	13.0	65.8	21.3	11.8	62.6	25.6
東 区	15.9	65.8	18.3	14.9	60.1	25.0
西 区	13.2	61.0	25.8	12.2	56.7	31.1
南 区	15.8	62.5	21.7	16.1	57.7	26.2
北 区	14.9	62.4	22.7	13.4	57.3	29.3
熊本市	14.6	63.9	21.4	13.8	59.3	26.9

※熊本市住民基本台帳より

◆南区まちづくりビジョンの基本目標・取組方針

基本目標	取組方針
1 農と漁業を誇れるまち	1 次の世代に農漁業をつなぎます。 2 生産者の顔が見える安全安心な農水産物を提供します。 3 多彩な農水産物への関心を高め、地産地消を進めます。
2 歴史・文化を育むまち	1 地域の歴史や伝統、文化を知り、郷土愛を深めます。 2 まちの資源として、地域の歴史等の情報を発信し、人々の交流を活発にします。 3 歴史や伝統、文化を子どもたちに伝えます。
3 自然と共生した住みやすいまち	1 山・川・海に身近に親しみ、豊かな自然を次の世代に継承します。 2 花や緑があふれるきれいなまちをつくります。 3 公共交通の利便性向上により、利用を促進します。
4 みんなが健康で元気なまち	1 一人ひとりが健康に関心を持ち、自ら健康づくりに取り組む環境をつくります。 2 地域の資源を活用し、楽しく運動できる取り組みを進めます。 3 高齢者・障がい者の生きがいづくりを進めます。
5 地域ぐるみで子どもを育てるまち	1 世代間の交流を深め、子どもたちに思いやりの心を育みます。 2 子どもたちがのびのびと学べ、遊べる環境をつくります。 3 人や地域のつながりを深め、子育てしやすいまちをつくります。
6 安全・安心なまち	1 地域を知り、防災意識を高め、一人ひとりが行動します。 2 ネットワークをつくり、地域ぐるみで支え合う体制をつくります。 3 河川や水路の改修など治水対策に取り組みます。 4 地域で防災や交通安全活動に取り組みます。
重点目標 復興するまち	1 被災者の生活再建に向けた総合的な支援に取り組みます 2 日頃から「おたがいさま」で支え合います 3 防災・減災のまちをつくります

◆ビジョンの検証方法について

主な取組と成果の整理

- まちづくりビジョンの基本目標に基づく10年の取組事業について実績や成果等を整理し、南区まちづくり懇話会等にて評価検証の資料とする。

区民アンケートの実施

- 南区まちづくりビジョン(以下「ビジョン」という。)策定時と同様の内容の区民アンケートを、南区在住の18歳以上、無作為の1,000人を対象に実施。ビジョンに掲げる取組内容に関し、区民の満足度等について調査する。
- 有効回収率:38.8%(388人)

まちづくり懇話会での意見交換

- 第1回(令和4年5月23日開催)
ビジョンの検証について説明。また検証の方向性について意見聴取した。
- 第2回・第3回(令和4年8月24日、12月21日開催)
懇話会委員、元懇話会委員、大学生、分野別の市職員によるワークショップを実施。ビジョンの各基本目標に基づく10年の取組事業や区民アンケート集計結果について評価し、成果と課題について意見交換を行った。
- 第4回(R5.2月17日)
ワークショップ等による検証結果について報告、さらに意見交換を行った。



南区まちづくりビジョンの検証 ～主な取り組み事例～



◆取組事例 基本目標 1 「農と漁業を誇れるまち」



◆世代間交流促進事業(R1)

高齢者を講師に児童と保護者を対象として、農業体験や郷土料理づくり、昔遊び等の体験型プログラムを実施し、世代間及び地域交流を図った。(参加者数:のべ300名)



◆火の君商品開発塾事業(R2)

城南町のまちづくり団体「TEAM城南ワンダホー」・熊本農業高校と連携し、地産地消の商品開発を実施した。城南町産のレンコン・卵等を材料とした「パン・デ・レンコン」を商品化。
(開発・販売協力店 5店舗(城南町))



◆「おいしい南区」魅力発信事業(R3)

南区特産のなす・キュウリ等を食材にレシピコンテスト等を開催し、多数の応募があった。R4にはレシピ集を作成し地域へ配布した。
(応募数:298点)

◆南区おいしいものの収穫体験・料理教室(R1)

南区の農水産物への関心度向上や地産地消の推進を目的とし、親子でトマトの収穫体験を行い、川尻公会堂で収穫したトマトを使った料理教室を開催した。(7家族 22名が参加)

◆取組事例 基本目標 2 「歴史・文化を育むまち」

◆南区の魅力発信バスツアー(R1)

南区の一体感を醸成し、まちづくりへの関心度向上を図るため、六殿神社・塚原古墳公園などの文化財や豊かな自然を巡るバスツアーを開催した。(参加者数:34名)



◆地域力強化支援事業(H30)

地域住民が関わり合う場の提供を支援するため、塚原歴史民資料館、塚原古墳公園にて星空観察などを行い一泊体験をした。(参加者数:32名)



◆南区を歩こう～まち歩き手帖作成(H25～)

南区の歴史や自然に触れながら、まち歩きやサイクリングを楽しめるコースを紹介する手帖を作成した(現在、vol.4まで作成)。(発行部数:4,500冊)



◆南区“いきいき”フェスタ開催(H25～H29)

南区各地域に残る伝統文化の披露や地域のまちづくり活動等のパネル展を開催し、南区の魅力を区内外に情報発信するとともに、地域間交流による賑わいを創出し、区の一体感の醸成を図るイベントを実施した。

(来場者数
H25:約9,000人 ⇒ H29:約4,000人)



◆取組事例 基本目標 3 「自然と共生した住みやすいまち」



◆自然を活かした地域連携支援事業(H26～H29)
 南区の活動団体と共同で、自然に親しむイベント(穴掘り大会、加勢川カヌー下り、雁回山わくわくウォーキング等)を実施した。(イベント参加者(延人数) H26:186人 ⇒ H29:145人)

◆幸田花のまちづくり育成事業(R1～R3)

小学校で肥後菖蒲の植え付けや肥後六花の学習会、肥後銀行で肥後山茶花の展示会を開催。また、スタンプラリーを開催するなど地区全体での花のまちづくりを実施した。

◆生物多様性に関するイベント開催(H29～:環境局)
 毎年5月に動植物園で、生物多様性について楽しく学ぶイベントを開催



◆いきもんネット(H30～:環境局)

生物多様性の保全等に関する自主活動に取り組む市民活動団体や事業者、学校、行政機関などが情報を共有して、互いに連携・協働し、情報を発信する制度を創設した。



◆デマンド型乗合タクシー(H25～:都市建設局)

公共交通空白地域と公共交通不便地域において、乗合タクシーを運行

(運行実績)
 ・R1:608便/ 726人 ⇒ R3:1,007便/1,118人
 (路線拡大)
 ・H25:1路線 ⇒ R3:9路線



◆取組事例 基本目標 4 「みんなが健康で元気なまち」

◆南区ウォーキングキャンペーン(H26～R1)

区民一人ひとりの健康意識の向上や運動に親しむ環境づくりを目的に、校区対抗などの団体戦、個人戦でそれぞれ歩いた歩数を競い合うキャンペーンを実施した。

(参加者:H26:120人 ⇒ R1:402人)



◆8020推進育成事業(H24～)

歯科保健を推進するボランティア(8020推進員)の育成や、8020推進員が地域住民を対象に実施する歯科保健啓発活動の支援を行う。

(参加者:H28:7,922人 ⇒ R1:14,704人)



◆南区“いきいき”スポーツ大会(H26～R1)

区民一人ひとりの健康づくり及び区の一体感の醸成を目的に、校区ごとにチーム編成し、区内のスポーツ施設でグラウンドゴルフ大会、ミニバレー大会を行った。

(参加者 H26:344人 ⇒ R1:289人)



◆南区フットパスコースづくり支援事業(H27・H29)

里山や田園地帯、古い街並みや風景をゆっくり歩きながら楽しむことを目的とし、川尻・城南地域のフットパスコースを地域住民と共同で設定し、コースマップを作成した。



◆南区人生会議の日 開催(R3)

医療と介護に関するわかりやすい啓発を目指し、R2に「南区地域包括ケアシステム推進方針」を策定。「地域包括ケアシステム」や終末期医療に伴う「人生会議」の大切さ、「メッセージノート」について知っていただくことを目的とし、南区人生会議の日を開催した。(参加者:170名)



◆取組事例 基本目標 5 「地域ぐるみで子どもを育てるまち」

◆南部世代間交流事業(H29)

おとなと子どもでしゃべり場「トークフォークダンス」開催。子どもが地域の仕組みや役員の役割を学び、地域活動を知るきっかけとし、担い手育成につなげる。管内の小中学生・自治会役員・交通指導員等が参加した。(参加人数:地域住民50人、小中学生50人)



◆南区子どもいきいき学びフェア(H26～28)

地域を愛する心を育むことを目的とし、南区の将来を担う子供たちに区の魅力・特性を学ぶ機会を提供するため、南区の魅力に関する体験講座やステージ発表等、子どもたちが参加・体験するイベントを開催。(参加者数:H26:約1,100人 H27:約1,000人)

◆子育て支援ネットワーク事業(保健子ども課)

各校区で結成された子育て支援ネットワーク活動の課題や解決方法を考え、「地域の子育て支援を地域で考え、実践するしくみ」を作るための活動を支援するもの。(参加者数:延べ581名(H24～R1))



ベビーマミーボックス
(飽田地区)

◆家庭訪問型子育て支援事業(H29～)

子育て中の保護者等の育児不安の軽減を目的に、ひきこもりがちな家庭が地域の中で安心して子育てができるように、養成研修を受けたボランティア支援員が定期的に訪問する。

(ボランティア支援員養成受講者数:H29:10人 ⇒ R3:24名)



◆幸田まちづくりサポーター事業(H29～)

地域に埋没する人材の発掘と将来の担い手の育成を目的に、まちづくり活動団体や個人等を地域住民自ら人材を発掘し、熊本市などが「まちづくりサポーター」として認定し、表彰を行う。(R4までの登録者数:個人114名、企業38社、団体1団体)



◆富合地域カフェ(H30・R1)

地域のつながり強化のため、富合校区のボランティアによる手作りランチの提供と併せて、おもちゃ作りや親子クッキングなどのイベントを開催し、地域住民の世代間交流を図った。



◆取組事例 基本目標 6 「安全安心なまち」

◆南区地域防災フェア(H25～29)

地域防災組織の活動促進のため、災害に関する研修等を実施し、防災力の向上に繋げる。

◇自主防災クラブ数 H24:104 → R4:163

◇地域版ハザードマップ作製数 H24:0 → R4:147



◆南区防災フォーラム(R3)

有識者の講演、パネルディスカッションを通して地域防災力の向上を図った。



◆飽田:みんながつながる「わがまち」支援事業(H29～)

住民の防災意識の向上、共助意識の醸成を目的に、小学生向けの防災体験学習や校区防災連絡会等向けの防災研修会を実施し、地域の人的ネットワークの拡大と地域コミュニティの活性化につながった。



◆南区防災バスツアー(R1)

防災意識の向上と地域防災力の向上を図るため、熊本地震で被害の大きかった益城町を訪れ、地震の規模や痕跡を学ぶ。防災士による防災学習や、防災食の調理・試食などを行い避難所運営について学んだ。



◆幸田さるいて守る事業(R2)

地域住民の健康づくりと地域の防犯・見守りの推進を目的に実施した。学校・ささえりあと協働で防犯・高齢者の見守りのためのウォーキングマップを幸田管轄を南北に分けて作製した。



◆取組事例 重点目標「復興するまち」



◆歯と口の健康づくり支援事業 (R1～R3)

健康センターや災害公営住宅集会所等において、被災者の健康維持を目的に、歯科相談、化粧療法を活用した口腔ケア教室、スポーツ吹矢体験及び8020推進員による啓発を実施



◆地域コミュニティ形成・強化支援経費(R1～R2)

熊本地震で甚大な被害を受けた城南町土鹿野地区の復興に向けた住民組織の運営を支援するもの。
学生による住宅再建調査や意見交換会等により地域住民の交流を図った。



◆仮設住宅等入居者・退去者支援事業(R3)

被災者が新たなコミュニティにおいて孤立化しないことを目的とし、専門の講師による支援者のための見守り講座を開催した。(計10回・総数184人が受講)

◆災害公営住宅入居者交流支援 (R1～R2)

災害公営住宅入居者が互いに支えあえる関係性の構築を図るため、餅つき大会や昼食バイキング等の交流会を開催した。また、交流会で使うテーブルやイスの設置など、交流促進の環境整備も実施した。

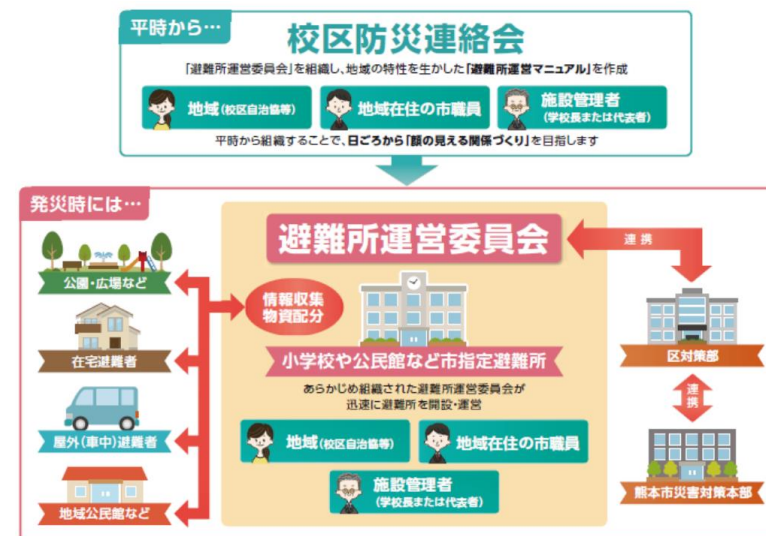
(参加者数(R1):285名/4回)



◆避難所運営委員会設立及び活動支援助成(R2～R3)

設立している避難所運営委員会に対し、運営等への活動助成金として3万円を助成した。

- ・校区防災連絡会 21/21校区
- ・避難所運営委員会 43/43校区
- ・自主防災クラブ 163/164自治会
- ・地域版ハザードマップ 89.6%作成 (R4年度末)



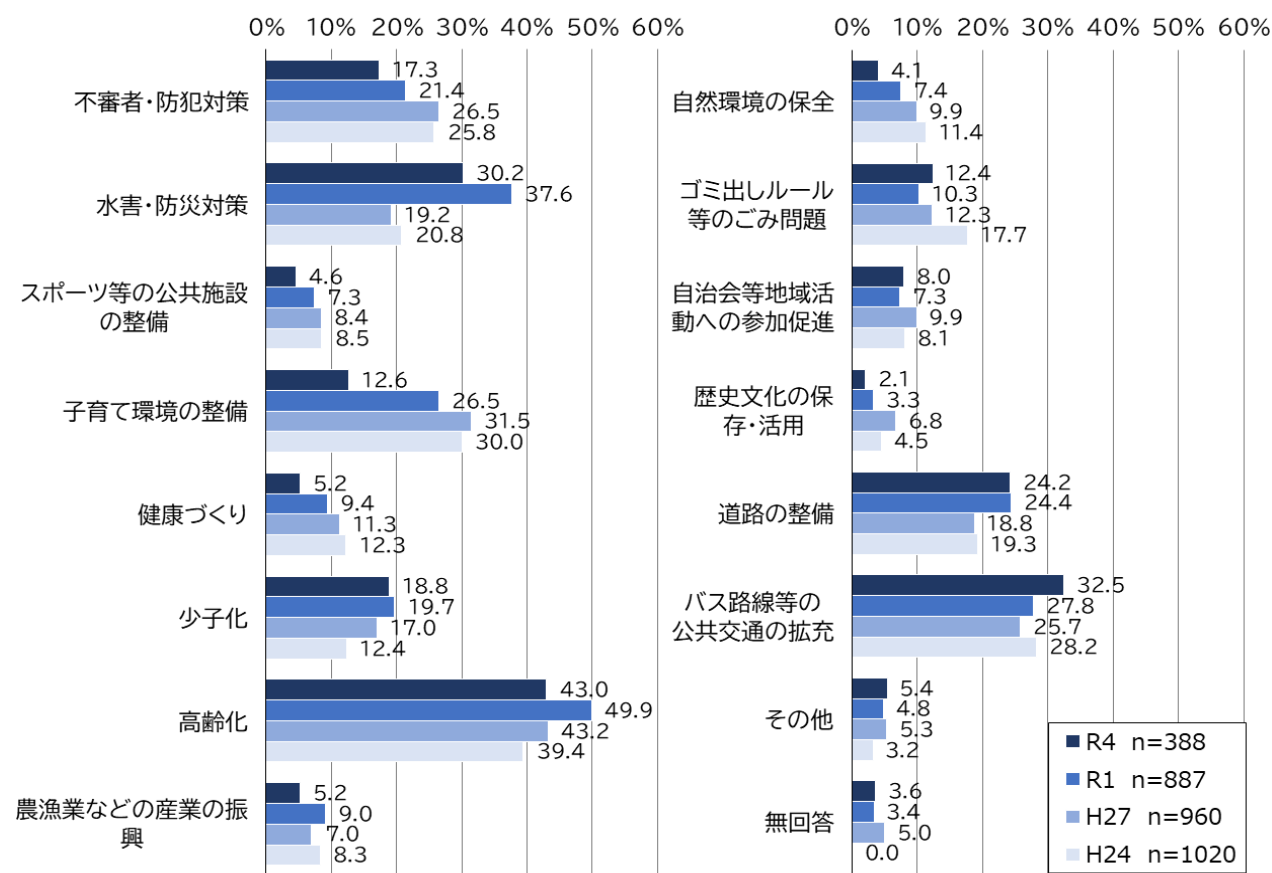


南区まちづくりビジョンの検証 ～区民アンケート～



1. お住まいの校区の課題は何だと思いますか？

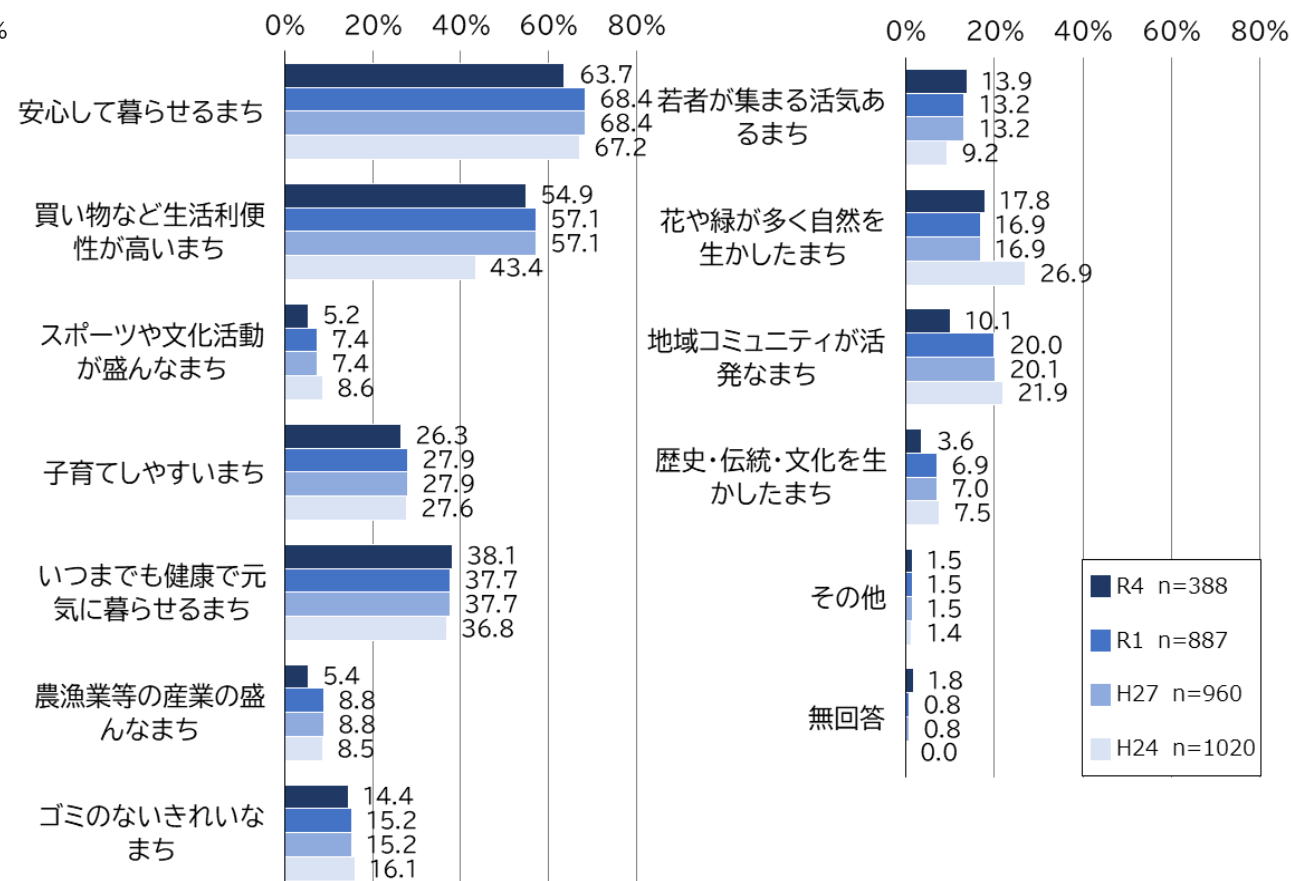
全地域において、「高齢化」を課題とする地域が多く、「公共交通」や「災害対策」も高くなっている。また「公共交通」問題は他の地域においてもいずれも高く、南区全体の課題と思われる。



2. 将来どのような校区や地域になってほしいと思いますか？

「安心して暮らす」ことができ、「生活利便性の高いまち」を望む人が大きな割合を占めており、生活環境の整備を求める住民が多いことが分かった。

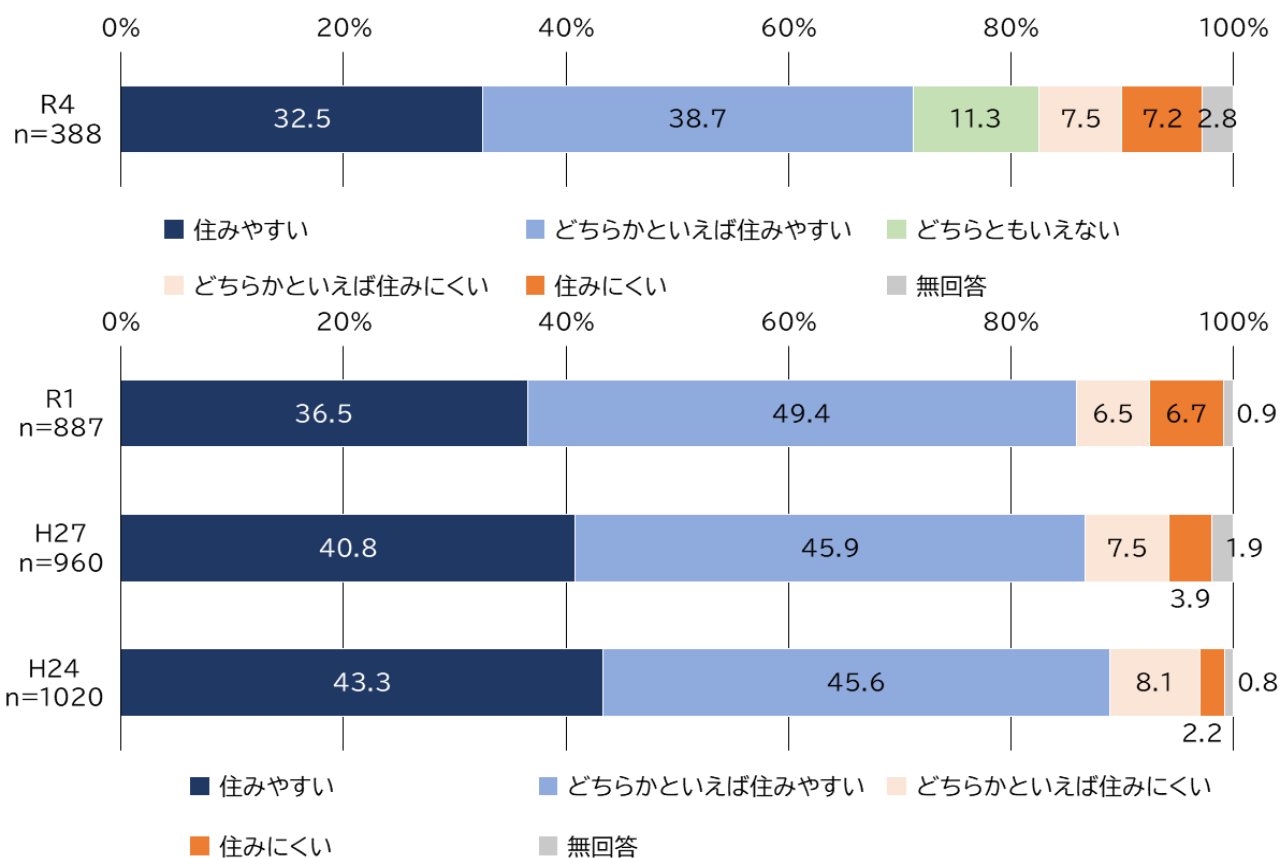
新型コロナウイルスの影響もあり、地域団体での活動や地域交流の希薄化が進んでいることで、地域の交流活動に関する意識が減少していると考えられる。



3. 現在お住まいの地域は住みやすいですか？

「(どちらかといえば)住みやすい」との回答がと全体的に高い割合で評価されたものの、年々「(どちらかといえば)住みにくい」割合が増加している。

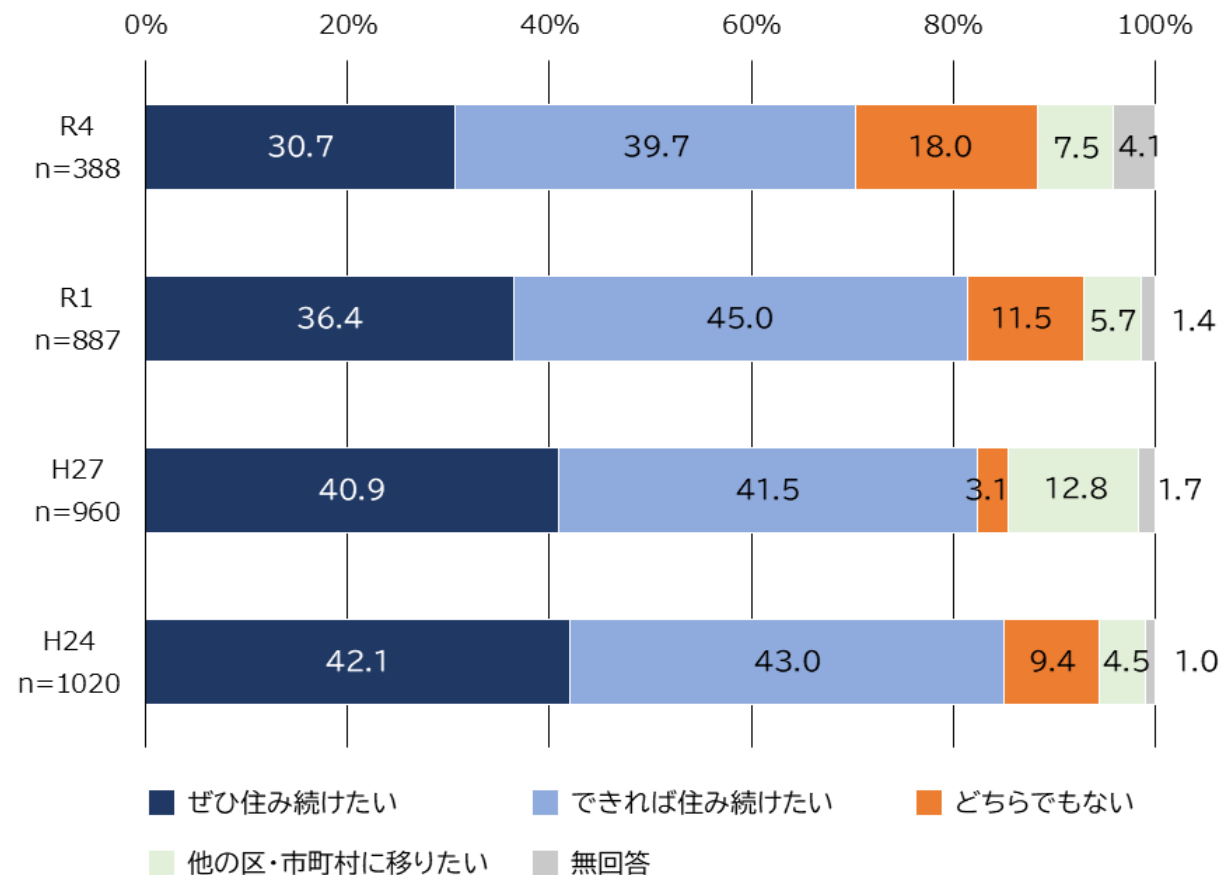
「住みにくい」を選んだ理由は買い物、公共交通の不便さの割合が圧倒的に高く、生活利便性の差が住みやすさの差として表れていることが考えられる。



4. これからも住み続けたいですか？

定住意向については70%以上の方が住み続けたいと考えてる一方、以前と比較すると、その割合は年々減少傾向にある。

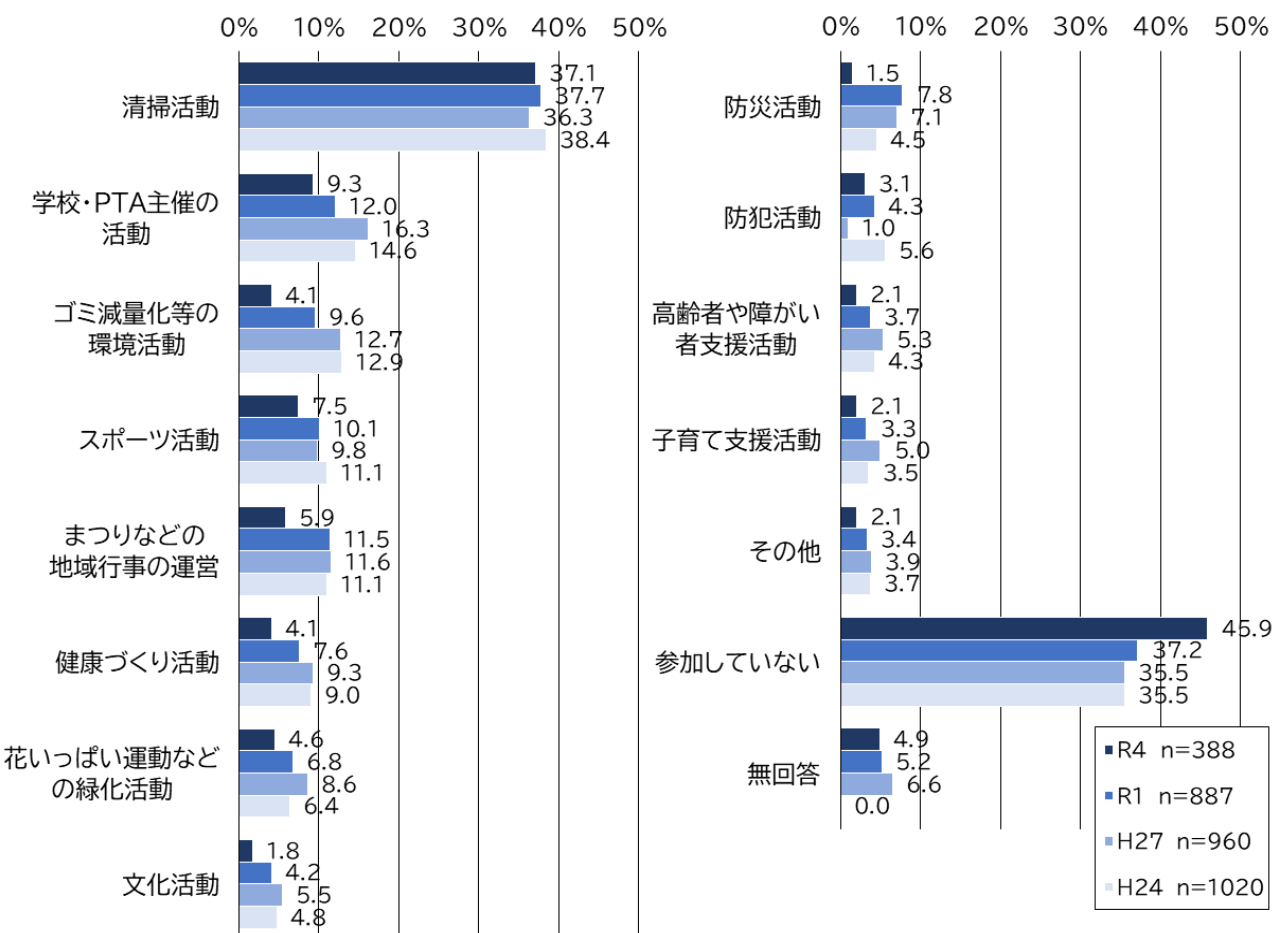
他市区町村に移りたい理由は、買い物や公共交通の不便さの割合が大きく占めていた。



5. 校区や地域で行われている活動で、今、参加しているものがありますか？

例年に比べ、「参加していない」の割合が著しく増加しており、それに伴い参加している活動の割合が全体的に減少している。

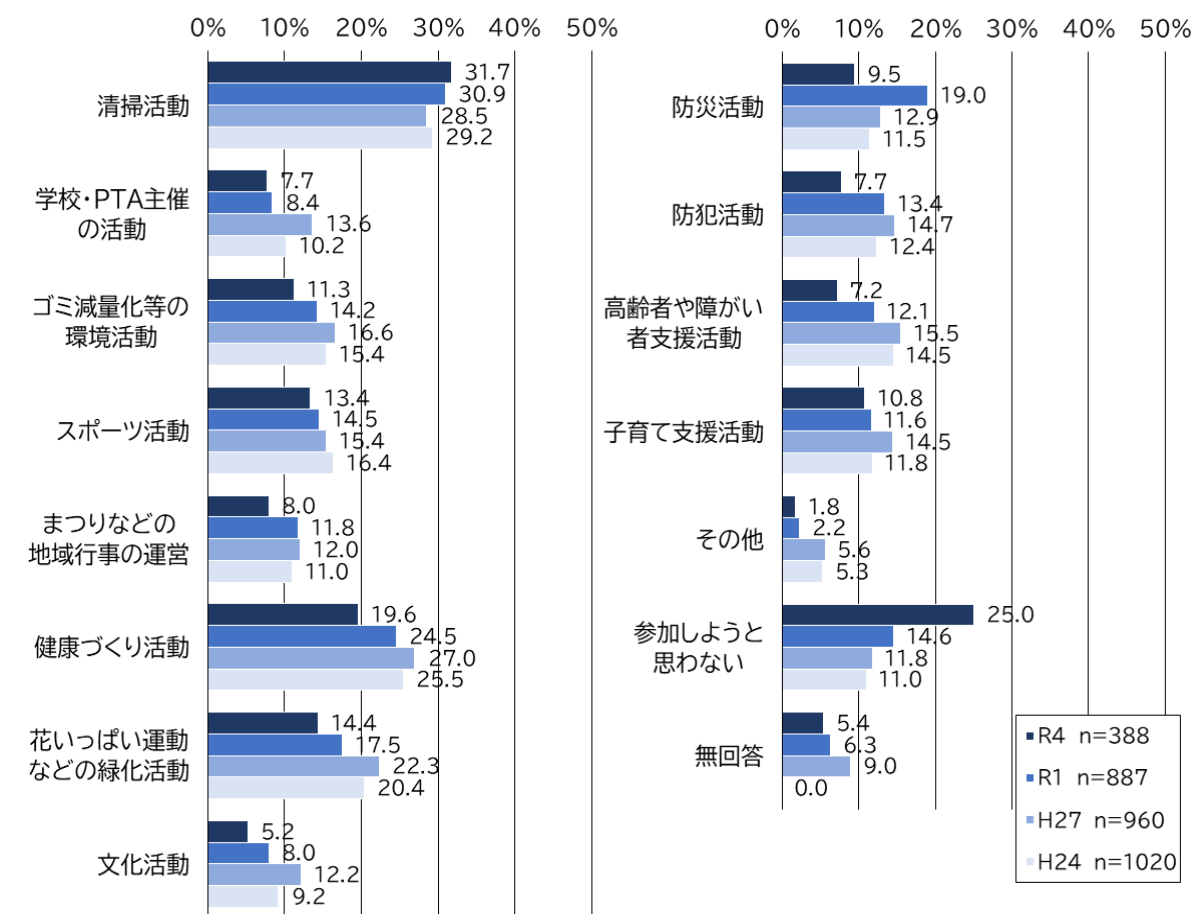
全体的には割合が高い「清掃活動」も、10・20代では10%程度の割合となっており、若い世代への参加を促す仕組みづくりが今後の課題と思われる。



6. 今後、どのような活動に参加しようと思いますか？

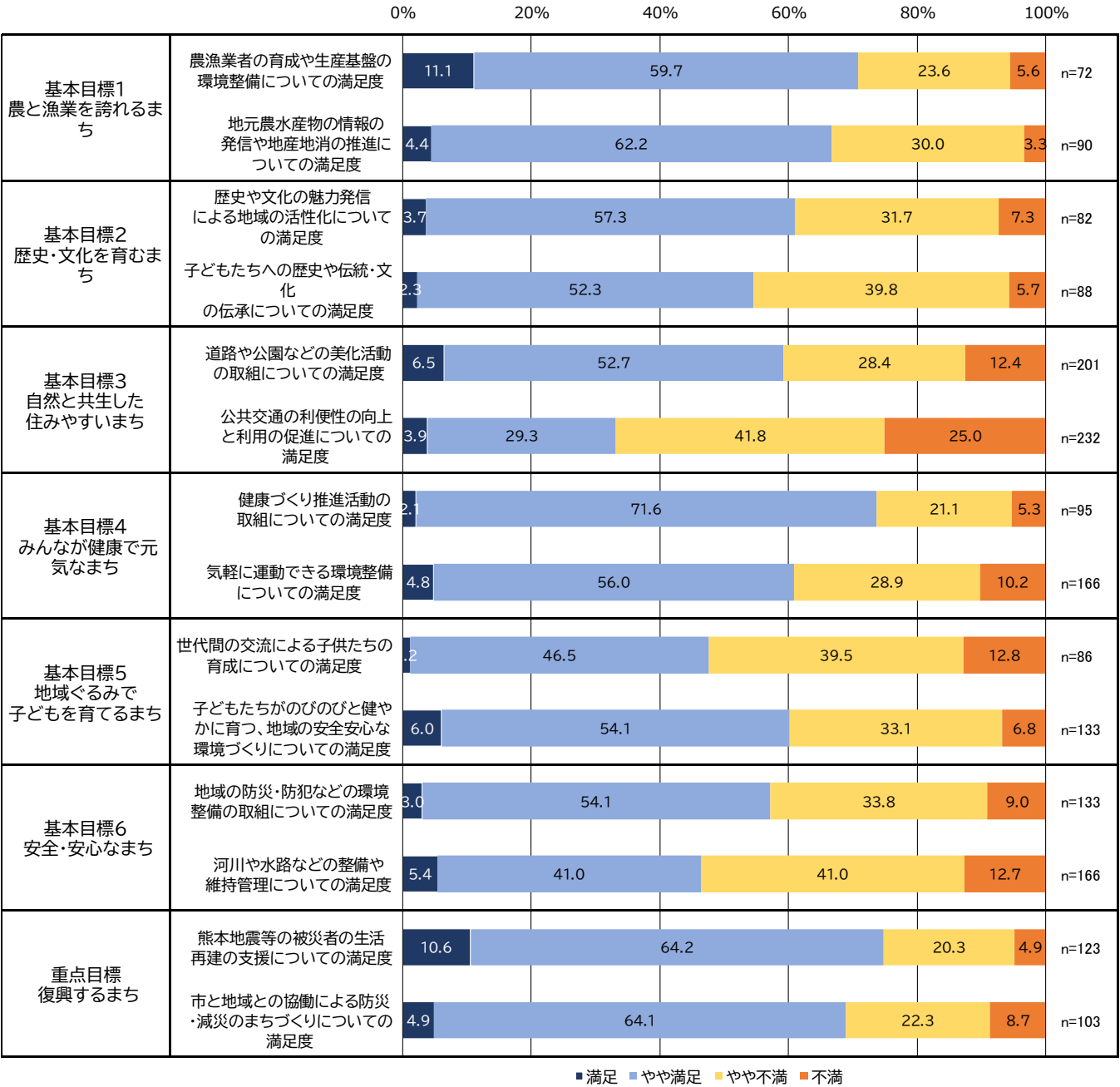
「参加しようと思わない」割合が25.0%と前回より約10%増加した。

参加しようと考えている人の割合は、「清掃活動」以外で全て減少しており、特に「防災活動」は前回と比べると約10%減少した。コロナ禍で地域活動への参加機会が減少し、それに伴って参加意識も低下していることが考えられる。



7. 南区まちづくりビジョンに掲げる取り組み内容の満足度
※「どちらともいえない」「無回答」除無

基本目標の取り組み内容の満足度は概ね高かったが、公共交通への不満が高く、また子育て問題や災害・防災に伴う河川や水路の整備等が不安視されている。



◆アンケート調査結果による成果と課題

成果

- (1) 住んでいる地域について、「住みやすい」「どちらかといえば住みやすい」と評価した割合が71%と高かった。
- (2) 熊本地震からの復興に関する取組についての満足度は高い。

課題

- (1) 各校区共通の大きな課題は、高齢化や路線バス等の公共交通の衰退である。
- (2) 地域の住みやすさに関しては、年々「住みにくい」と回答する割合が増加傾向にあり、その理由としては買い物や公共交通に関する不便さが大多数を占めている。
- (3) 校区や地域の活動への参加については、若い世代の「参加していない、参加しようと思わない」の割合が著しく増加している。
- (4) 理想の地域像については、「安心して暮らせるまち・買い物など生活利便性が高いまち」の割合が高い一方、ビジョンに掲げる「安全安心なまち」や「公共交通の利便性の向上」の取組への満足度は低い。
- (5) 住民主体で取り組むまちづくり活動に関して、20～40代の世代には関心が薄い。



南区まちづくりビジョンの検証 ～まちづくり懇話会～



基本目標	主な意見の内容
■基本目標1 農と漁業を誇れるまち	・後継者の確保と育成の支援が必要。 ・農業研修など新規就農者支援制度の有効活用を図るべき。 ・事業者は、高品質で安全安心な農水産物を継続生産。 ・区民は、地元の農水産物を手にとり、地産地消に心がける。 ・他都市での宣伝販売会の実施やSNS等を活用したPRを行う。 ・イベントを開催し、区民に農水産物の関心を高めてもらいたい。
■基本目標2 歴史・文化を育むまち	・まち歩き手帖などを地域で活用できる仕組みが必要。 ・イベント開催により各校区と交流し、文化財に触れることで、見識を広げることができる仕組みづくりが必要。 ・総合学習の時間を使うなど、学校、地域、行政、家庭が連携した取り組みが有効。 ・担い手育成のため、学校で地域文化に触れるための体験学習を行い、子どもたちへの文化継承をすべき。
■基本目標3 自然と共生した住みやすいまち	・自然に関心がない人の底上げには、子どもがいる世代が参加する講座の開設など、人材育成のシステムづくりが必要。 ・緑化の推進には、地域への呼びかけやボランティアも含め、最小限の予算で維持管理できる仕組みが必要。 ・植樹活動などで子どもたちの自然に対する知識を育てることが重要である。 ・移動販売など、モノやサービスを得るために、公共交通を利用しなくてもよい社会づくりが必要。

基本目標	まちづくり懇話会での主な意見
■基本目標4 みんなが健康で元気なまち	・食生活の大切さを知るためには、子どもの頃からの教育が重要。 ・スマホでリモート体操という手段はあるが、スマホをうまく扱うことができない人がいるという課題がある。 ・いきいきサロンの会場が増えたことで、固定化していた参加者も地域の交流について考えるようになり、生きがいを持つようになった。 ・いきいきサロンを運営するボランティアも高齢化で担い手が少なくなっている。
■基本目標5 地域ぐるみで子どもを育てるまち	・コロナ禍でイベント会場の利用ができないなど、子育ての環境には問題が多かった。 ・校区自治協議会等の会議の場で、子育てに関する情報発信をしていくとよい。 ・ハイブリット方式を用いて、コロナ禍でも子育てサークルを開催できるよう検討してほしい。 ・コロナ禍で活動できていない部分が多く、活動を再開すればほとんどのことが改善できると思われる。
■基本目標6 安全・安心なまち	・ハザードマップの作成率が高いのは南区の特徴であるが、自主防災クラブの結成率99%、それをどう活かすかが重要。 ・地域が主体となって地域に応じた避難行動について考え、地区防災計画を作成し実行する。 ・防災まち歩きなど防災に関するイベントは継続したい取り組みである。 ・防災活動の担い手不足、役員の入れ替わりにより活動継続が難しい。



南区まちづくりビジョンの検証 ～区としての総合評価～





基本目標1

農と漁業を誇れるまち

農漁業については、区民アンケートの結果からみると満足度は比較的高い結果であり概ね達成できたといえるものの、後継者の育成・支援に関しては、区に実質的な権限がないことからの達成は困難であった。今後は関係各課と連携し、南区の特徴である農漁業の魅力を効果的に発信し、区民の農水産への関心を高める取り組みが必要である。

基本目標2

歴史・文化を育むまち

歴史・文化に関しては、バスツアーなどの体験を通して人々の交流を図りながら取り組んでおり、満足度も高く概ね達成できたと考えられる。一方でまち歩き手帖やフットパスの広報不足との声も上がっており、今あるツールのデジタル化を進めながら情報発信を図る必要がある。

また、次の世代につなげていくためにも、文化伝承の機会を提供することで文化の継承を進めることが重要と考える。



基本目標3 自然と共生した住みやすいまち

区民アンケート、ワークショップともに公共交通の利便性を課題とする意見が多く、達成感が低かった。一方、道路や公園などの身近な場所の美化活動においては、概ね達成できたと考えられる。

出前講座等による子ども達への教育・体験活動や、地域や学校・家庭と連携した緑化の取り組みを進めることで、さらに満足度は高まるものと考えられる。

基本目標4 みんなが健康で元気なまち

健康づくりの推進、高齢者や障がい者の生きがいづくりにおいては、満足度が比較的高く、区が主体となった取り組みについても一定の評価が得られたと考えられる。

運動できる取り組みについては、概ね達成できているものの、依然としてコロナ禍の影響を心配する声もあるため、感染防止と活動の両立ができるよう、その内容や方法に変化を加えて活動を実施していく必要がある。

◆区としての総合評価



基本目標5 地域ぐるみで子どもを育てるまち

地域の見守りや声かけにより、子どもたちの安心安全な環境づくりは概ね達成できている。一方、コロナ禍による育児サークル等の休止や子育てに関する情報不足など、子育て支援に関する課題がある。

今後は、コロナ禍に対応した新たな子育て支援活動の方法や子育てネットワークのあり方について検討を行っていくことで、地域ぐるみで安心して子育てのできるまちの実現につながると考えられる。

基本目標6 安全・安心なまち

安心して暮らせるまちづくりへの関心が高く、自主防災クラブの結成率や地域版ハザードマップ作成率の高さなど、区全体の防犯・防災意識が向上したことにより、「安心安全なまちづくり」については概ね達成できたといえる。

河川、道路の危険箇所の整備に関しては、必要な予算の確保に努めるとともに、国・県管理の河川等については連携を強化し整備を支援していくことが必要である。